

---

# 発達理論の学び舎

**Back Number: Vol 305**

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.1091 アテネ国際空港にて\_At the Athens International Airport陽\_The Sun of Athens

---

## 目次

- 6081. 満月を眺めながら：ヨルク・シュマイサーとの出会い
- 6082. 反復と治癒
- 6083. 今朝方の夢
- 6084. 夢のシンボルを振り返って
- 6085. 届けられた2枚のデビットカード
- 6086. 建築美への関心：上の階の住人との対話から
- 6087. 身近にある豊かな自然：フリースランド訪問への思い
- 6088. 今朝方の夢
- 6089. 夏らしい1日を振り返って
- 6090. 昨日の考え事
- 6091. マルクスの重要な指摘とマインドを養生してくれる読書
- 6092. 創作活動と「不在の不在化」そして「共存在感」：今朝方の夢
- 6093. 夢を書き留め、夢と共に生きた明恵上人
- 6094. メタクライシスの時代に：「献身」について
- 6095. 今朝方の夢
- 6096. 大いなる導きに感謝して
- 6097. 本日の計画
- 6098. 今朝方の夢
- 6099. 滞在許可証の再申請を終えて：夕方の嬉しい訪問者

---

6100. あの頃の思い出：フローニンゲンの街の根底に流れる平穏さ

---

## 6081. 満月を眺めながら：ヨルク・シュマイサーとの出会い

時刻は午前6時半を迎えた。今、小鳥たちが元気な鳴き声を上げている。昨日と同様に、今朝のこの時間帯は、遠くの空に白く輝く満月を拝むことができる。先ほどは、窓辺に立ってぼんやりと満月を眺めていた。

視力回復に向けて、遠くの空を時折眺めるようにしており、それと同じような感覚で満月を眺めてみようと思ったが、満月は特別なのか、それを眺めている時に喚起されるものは、単に空を眺めているものと少し違うものがあつたように思う。満月に付帯している諸々の意味や物語があるようなのだ。もちろん空にも何らかの意味や物語があるとは思いますが、私が空を眺める際には、そうした意味や物語に囚われることなく、空全体と一体化するような感覚を持つことがある。

ちょうど昨日、哲学者のロイ・バスカーも似たような指摘をしていた。今日もまた、空をぼんやりと眺めることを通じて、非二元の意識状態に参入することがあるかもしれない。空を眺めることは、意識状態を変化させ、整えてくれることに力を貸してくれる。

今日のフローニンゲンは、昨日に引き続き天気が良い。来週の木曜日まで雨マークは一切ない。今日の最高気温は28度、最低気温は16度とのことであり、今日もまた過ごしやすい1日になりそうだ。

昨日ふと、カラフルな曼荼羅迷路を描いてみようと思いついた。幼少期の頃、よく迷路を描いており、その時の体験をふと思い出し、曼荼羅模様の迷路を描いてみようと思つたの

---

である。実際に数枚ほど衝動的に描いた。その前に曼荼羅について調べていると、ドイツ人のヨルク・シュマイサー（1942-2012）という画家に出会った。彼は世界中を旅し、京都の芸術大学にも留学し、オーストラリアを拠点に制作を行なった画家である。

「旅する版画家」と称されているシュマイサーは、彼自身のテーマとして「変化」を挙げていた。人間の成長や発達について探究と実践をしている自分にとって、「変化」というのは大切なキーワードであり、シュマイサーの絵に関心を持った。実際に彼の絵を見てみると、大変面白いものが多かった。シュマイサーは、この世界と彼自身に起こる全ての変化を版画の画面にとらえようとする試みに従事し続け、その姿勢と取り組みにも大いに共感した。

調べてみたところ、彼の画集に『ヨルク・シュマイサー 終わりなき旅』というものがあることがわかり、この秋に日本に一時帰国した際にはそれを購入しようかと思う。また、シュマイサーの作品は、イギリスの大英博物館やドイツのドレスデン国立美術館などに所蔵されているとのことなので、とりわけ今度ドイツに行った際には、ドレスデン国立美術館に足を運ぶことを検討したい。フローニンゲン：2020/8/6（木）06:49

## 6082. 反復と治癒

時刻はゆっくりと午前7時に近づいている。空は薄青く澄み渡っていて、遠くの空にはまだ満月が浮かんでいる姿が見える。耳を澄ませば、小鳥たちの鳴き声が時折聞こえてくる。今日はほとんど風がなく、無風状態の落ち着きがある。

---

昨日、ロイ・バスカーの書籍のみならず、“**Desire in Chromatic Harmony: A Psychodynamic Exploration of Fin de Siècle Tonality**”の続きを読み進めていた。その中で、フランスの哲学者ドゥルーズの興味深い指摘があった。それは、「全ての治癒は、反復的活動の背後にある」というものである。この言葉を受けて、確かに、断食も反復的食習慣を見直すことにつながり、その背後にあるものを探っていくことに導く形で治癒をもたらすということについて考えていた。諸々の病理というのは、突如として0から100の形で生み出されるというよりも、何かしらの反復を通じて、それが累積する形で発生するものなのではないかと思う。

そうした観点から、心身上及び社会上の病理の治癒に向けては、反復的活動の所在と性質を突き止め、その反復を脱却させる形の新たな反復が必要なのだろう。私たちは知らず知らず諸々の反復的行為を通じて生きている。それは身体上の習慣であったり、精神上的の習慣として形になって現れる。そのように考えてみると、私たちは反復的生き物なのだろう。

既存の反復構造から脱却し、新たな反復構造に向かうこともまた、成長・発達の特質であるということが見えてくる。今の自分がどのような反復構造の中において、いかような反復を行なっているのか。改善が必要な反復はないかどうか。そのあたりを検証し、必要であれば既存の反復的行為をやめ、反復的行為を生み出す既存の反復構造に変わる新たな反復構造を構築していく。悪き習慣から脱却し、良き習慣を始めるというのはそういう意味なのだろう。

---

食習慣においては、これまでも良好なものであったが、今回断食を行うことによって、細かな微調整をした。それは、断食後の回復食からニンジンを食べ始めたことである。そういえばこれまでの夕食には赤い野菜が入っていないことに気づき、またニンジンの栄養価を改めて調べたところ、ニンジンを食べようと思ったのである。近所のスーパーには、オーガニックニンジンが袋に入って売られていて、これまで購入していた野菜類と合わせて購入した。

オランダは、オーガニックの食材の値段がお手頃であり、そのスーパーで購入できるオーガニックの野菜や果物はとても良心的な価格である。購入したニンジンはかなりの量があり、保存方法について調べてみたところ、ニンジンが土に埋まっていたままの形で、つまり立てて冷蔵庫に保存することが良いと書かれていた。また、袋のまま保存すると、数日ほどで痛み始めるとのことだったので、一本一本まずはキッチンペーパーで水分を拭き取り、アルミホイルに包んでそれらをビニール袋に入れて、冷蔵庫に立てて保存するようにした。これで鮮度を保った形で毎日美味しくニンジンをいただくことができるだろう。

そうした食生活上の若干の変化があった。その他にもこれまで以上に、無駄なこと、とりわけ単なる情報をインターネットで検索することなどを行わなくなった。もちろん、必要なことは調べるが、無駄なことはネットで調べないようにしている。ネットを見るような時間があれば、その分創作活動や読書に時間を充てたり、休息を取るようにしている。今後も引き続き、自分が日々何気なく行なっている反復的行為に自覚的になろうと思う。さ

---

らには、社会が生み出している反復的行動とその構造にも注目をしていく。そこに解放と自由への道がある。フローニンゲン：2020/8/6（木）07:07

### 6083. 今朝方の夢

時刻は午前7時15分を迎え、つい先ほど洗濯機を回し始めた。今朝はまだ夢について振り返りをしておらず、今から夢の振り返りを行い、その後に創作活動と読書に取り掛かりたい。

夢の中で私は、実際に通っていた小学校の校庭にいた。校庭で友人たちと遊ぼうと思っていたのだが、前日に降っていた雨のせいで、グラウンドはぬかるんでいた。わずかばかりグラウンドを走るだけでも泥が飛び跳ねてしまい、服が汚れてしまうようだった。このままグラウンドで遊ぶのかどうかを考えていたところで、放送が鳴った。放送の声に耳を済ませると、放送をしているのは生徒ではなく、先生の誰かだった。その先生は、「グラウンドで遊ぶ場合は、上半身裸になりなさい」と述べていた。

確かに、それであれば服に泥が飛び散ることを防ぐことはできるが、上半身裸になるには少し寒いように思えた。そのため、私たちはグラウンドで遊ぶことをやめ、グラウンド近くの保健室の窓のそばに向かった。そこでしばらく友人たちと立ち話をしていると、教室に戻って教室で遊ぼうということになった。そこから2人の友人と私は、6年生の時に使っていた校舎のある方に向かって行った。その際に、低学年が使っていた校舎から建物に入り、中庭の通り道を抜けて、目的の校舎に向かった。

---

高学年用の校舎に辿り着いたとき、私は廊下をスケートをするかのように滑りながら進んでいった。そして、3階の教室にたどり着くための階段の前にやってきた。階段を見ると、どういわけか、階段の途中途中に鉄棒が横に通されていた。私はその鉄棒の上に足をかけ、そこから「リボーン (reborn)」と心で唱えながらジャンプして上へ登っていった。後から階段を登ろうとしている友人にも、必ず「リボーン」と唱えるように勧め、彼らもまたその言葉を心の中で唱えながら上の階にやってきた。するとそこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は見知らぬ大きな広場にいた。雰囲気としては、それはおそらく日本のどこかだと思う。私は、小中学校時代の友人数名とその広場で遊んでいた。上空をふと見上げた時に、遠方の空にスペースシャトルの姿が見えた。どうやらこれから着陸するようなのだが、どうも様子がおかしい。そこから様子を見守ろうとしていると、すぐさまスペースシャトルに異常が起き、空中分解し始め、コクピット部分が脱出モードになって、自分たちがいる広場の方に向かってきた。

すると、スペースシャトルの主な機体部分は広場の近くに墜落し、様々な破片がこちらに飛んできた。危うく私たちにぶつかるところだったが、誰にもぶつかることはなかった。そして、肝心のコクピット部分は広場に墜落した。見ると、コクピットには3人ほどの乗組員が乗っていて、身動きを全くしておらず、全員死んでしまったのかと思った。乗組員が動かなくなっていたので、私は少々不安に思い、静かに後退りしていた。

---

すると、1人の友人が「逃げてはならない」と述べた。私は逃げようとしていたわけではなく、別の角度からコクピットを見ようと思っていたのである。そのようなやり取りを友人とした後に、乗組員の全員がなんとか無事に生きていることが確認された。コクピットからよろめきながら出てきた乗組員の中に小中高時代の後輩がいた。その他の乗組員は、私が通っていた高校の体育の先生と無線で連絡を取り、先生から事情聴取を受けていた。

私はこの機会に、後輩にスペースシャトルについて色々話を聞こうと思った。まずは、スペースシャトルが落ちる確率と今回の墜落事故の原因などについて尋ねてみた。するとその後輩は、墜落した主な原因は、無駄に食事を搭載していたことだと述べた。そこで無線で連絡を取っていた先生が、別の乗組員に対して何か注意をしているようだった。どうやらその乗組員は、シンガポールのインターネット番組を通じて、宗教的儀式で用いられる向精神性の飲み物を一般に使用することを推奨する発言を行っていたらしく、そうした発言は程々にするようにと先生に注意を受けていた。フローニンゲン：2020/8/6（木）

07:38

### 【追記】

前半の夢の場面の最後で心の中で唱えていたマントラが興味深い。「リボーン (reborn)」というのは生まれ変わり、ないしは再誕を意味する。そして、階段と鉄棒のシンボルは、発達の階梯を表しているのではないかと思った。

それらを合わせて考えてみると、私は発達の階梯を飛躍するかのようにして上に上がっていき、その際にマントラを何度も叫ぶことによって、再誕を何度も経験していたようだ。

---

今の自分はやはり、発達プロセスにおいて上昇期にあるのかもしれない。さらには、スペースシャトルが墜落した原因について後輩が述べたことについても改めて考えていた。スペースシャトルを、本来無限の可能性を持ち、例えず未知なるものに向かっていく私たち人間として捉えてみると、それが墜落してしまった原因が食べ物の積み過ぎというのは、現代人の姿を表しているように思える。

つまり、無駄に食べ物を食べる現代人は、本来の可能性を発揮することができず、未知なる世界の探求がままならぬ形で墜落してしまうということを示唆しているものだったのではないかと思う。ちょうど断食を終えていたこともあり、今回の断食経験からもそれはとても共感できる。フローニンゲン：2020/8/7（金）13:20

#### 6084. 夢のシンボルを振り返って

時刻は午後7時半を迎え、今夕涼みをしている小鳥たちが鳴き声を上げている。今日もまた天気が良く、それでいて涼しげな1日であった。この時間帯になって、今朝方の夢に現れたスペースシャトルのシンボルが何を意味しているのかについて考えていた。その意味を考えるきっかけとして、ドリームダイクショナリーを調べてみたところ、スペースシャトルは未知なるものを探索することを示唆しているようだ。

ここ最近、新たな知識領域や実践領域の探究を進めている自分の姿を冷静に眺めてみると、その説明には納得いくものがある。スペースシャトルの打ち上げのシーンが描かれて

---

いたのであれば、それは何か新しいプロジェクトや関係性の始まりを示唆するとのことであったが、私はむしろ逆に、スペースシャトルが着陸する夢を見ていた。

実際のところは、それが墜落しようとしている姿が描かれており、コクピットの部分はかろうじて無事に地上に到着し、乗組員3人が生きていたという内容だった。ここ最近始まった新たな探究と実践は、茨の道であるが、それはどこかで無事に地に足をつけるということだろうか。そして、「3」が意味することについて考えてみたところ、それはひょっとして「真・善・美」の3つを表しているのかも知れないと思った。そのように考えてみると、今朝方の夢は実に示唆深いことがわかる。ここからもまた、夢を頼りに自分の人生の意味を探求していこう。

今日から読み始めた“**Reflections on metareality: Transcendence, emancipation and everyday life**”はとても知的刺激に満ちている。得るものや考えさせられることが非常に多く、思わず唸ってしまう箇所が数多くあり、必然的に書き込みも増えていく。本書はこれから何度も繰り返し読み込んでいこうと思う。残念ながらバスカーの翻訳書はほとんど出ておらず、バスカーはウイルバーと並ぶメタ理論の創出者であり、同時にウイルバーと同じぐらいに多くの書籍を出しているのだが、彼の仕事が日本に全くと言っていいほど紹介されていないというのは非常に残念なことである。

ここからは、バスカーの思想を自分の実践領域を通じて紹介していきたいと思う。バスカーの仕事に加え、自分の実践領域を通じて、ハーバースやシュタイナーの思想についても広く紹介していきたい。

---

本日、無事に銀行から2枚のカードが届いた。これにて明日からは、ひとまずオランダの銀行に紐づいたデビットカードで買い物ができるようになった。早速、カードを有効化して、モバイルアプリを使えるように設定しよう。それが済めば、先日アテネでの窮地を救ってくれたハーグに住む友人に、借りたお金を返そうと思う。フローニンゲン：2020/8/6

(木) 19:33

### 6085. 届けられた2枚のデビットカード

時刻は午前6時を迎えようとしている。今朝の起床は午前5時であり、目覚めた時にはまだ外が薄暗かった。そんな中、寝室の窓の外をふと眺めると、遠くにある教会の上空に朝焼けが出ていた。薄赤色の朝焼けをぼんやりと眺めて1日を始めた。そうした美しいものを眺める形で1日を始めることができるのはとても有り難い。今この瞬間は、遠くの空に薄ピンク色の朝焼けが出始めている。おそらく寝室の方は朝焼けの色が濃いのだと思われるが、書斎から見える朝焼けはまだ薄い。

8月も第2週を迎え、ゆっくりとではあるが日の出の時間は遅くなっている。一方で、ここ最近ではフローニンゲンも気温が高くなってきている。今日から1週間近く、最高気温が30度前後の日が続く。今日は31度まで気温が上がるそうだ。湿度は46%ほどなので、カラッと暑さになるだろうか。湿度が10%変わると、体感温度が1度ほど変わると言われており、ちょうど明日も31度まで気温が上がるようなのだが、明日の湿度は今日よりも10%弱高い。この機会に、今日と明日の体感温度を比較してみよう。

---

昨日、無事に銀行からデビットカードが2枚届けられた。1枚は個人用、もう1枚はビジネス用である。先日のアテネの件で、ハーグに住んでいる友人から借りていたお金を早速モバイルアプリを通じて返そうと思っていたのだが、カードをアクティベーションさせる必要があるようであり、カードを使うことがまだできなかった。

私が4年前にオランダにやってきた時には、確か電話でもカードのアクティベーションができたような気がするのだが、今は銀行で現金の引き出しをするか、残高証明をするかによってアクティベーションができ、そのほかの手段としては最初に買い物をする店のカードの読み取り機にPIN（パスコードのようなもの）を打ち込めばいいとのことだった。

今日もまた街の中心部の銀行にジョギングがてら足を運び、そこで残高証明をすることを通じてカードをアクティベーションさせようかと昨日の段階では考えていた。ただ、近々また街の中心部に足を運ぶことになり、ビジネス用のカードは特にすぐに使うこともないので、本日は近所のスーパーに足を運び、そこでの買い物の際に個人用のカードをアクティベーションさせようと思う。

4年前に使っていたものとはカードのデザインも変わり、何か新鮮な気持ちである。銀行から送られてきた封筒に同封されていた説明書を読むと、今回のカードは、25ユーロ以下の買い物であれば、PINを機械に打ち込む必要なく、機械にかざすだけで支払いができてしまうとのことだ。それはとても便利なので、本日アクティベーションをさせて以降はどのように支払いをしてみよう。本日購入する予定のものは、バナナ、ニンニク、ペーパータオル、トイレトペーパーしかないなので、それであれば25ユーロ以下であり、すでにアク

---

---

ティベーションがなされていればタッチレスで支払いができる。このように、PINコードを機械に打ち込む必要のないタッチレスな形での支払いは、今回のコロナを受けてまた普及していくだろう。

モバイルでの支払いや、そもそも法定通過ではなく暗号資産（仮想通貨）を通じた支払いも今後さらに普及していくに違いない。昨日届いたカードは、“maestro”のロゴがあるキャッシュマシーンであれば、オランダだけではなく、世界どこでも現金を引き出すことができるのとのことであり、それも今後を考えて一応覚えておこう。フローニンゲン：

2020/8/7（金）06:11

#### 6086. 建築美への関心：上の階の住人との対話から

時刻は午前6時半に近づいてきており、先ほどよりも空がより一層明るくなった。今日は雲1つない快晴である。

昨日、協働者のある方とオンラインミーティングをしている時に、松井証券の松井道夫さんが「美的経営」という考え方を通じて事業を営んでおられることに関心を持った。どうやら松井さんはもともと芸大に入りたいと思うぐらいに芸術が好きなお方だったことを知った。そこから調べてみた時に、松井さんは私の大学の先輩でもあり、松井さんの記事の中に母校の建築様式について触れられていた。私が日本で卒業した大学は、キャンパスが美しいことで知られているが、当時の私はあまりその美しさがわからなかった。キャンパスが持つ絶対的な美を感じ取ることもできず、また他の大学のキャンパスがどのような

---

ものかも知らなかったので、相対的に自分の大学のキャンパスを美しいと思うこともなかった。だが、改めてキャンパスの風景を心の中で思い浮かべてみると、1つ1つの建物とその配置を含め、確かにそこには美的景観が広がっていたように思う。とりわけ、ロマネスク建築の建物は、大学内でも美の象徴だった。

そこから少しばかりロマネスク建築について調べており、今後は音楽や絵画だけではなく、建築的な美にも関心を持っていこうと思う。せっかくヨーロッパで暮らしているのだから、ヨーロッパの街に溢れている美しい建物の美をより深く味わいたいものである。そのような理由から、今後は建築美についても探求をしていこう。音楽のように視覚的に捉えられない美、そして絵画や建築のように視覚的に捉えることのできる美の双方の探求を進めていく。

数日前に上の階に新しくやってきた住人と一昨日の夜に少しばかり挨拶がてら話をした。実際のところは、その住人は夜に周りに響く音楽をかけていて、もう時刻は午後10時を回っており、私はすでにベッドの中において、音楽のベース音の響きで入眠が難しかったのでその件について話をしにいこうと思ったのである。

日本では基本的に、住民同士がこうした問題に関して直接話し合いをするという事はあまりなく、こうした件については苦情センターがどこかに連絡をするのが一般的かと思う。ところが、オランダはそうではなく、基本的には住民同士で話し合うことが大切にされる。一昔前にも別の近隣住民の行為について、不動産屋に連絡したことがあるのだが、

---

その時に言われたのは、「オランダではまずは当事者同士が話し合うことが文化である」というものだった。

上の住人はまだやってきたばかりであり、音楽をかけながら部屋のアレンジをしたり、引越し祝いに友達でも呼んでいるのだろうと想像していたので、私の心はとても寛容だったのだが、それでも今後を考え、そして挨拶も含めて、一昨日の夜に上の階のドアをノックした。すると中から出てきたのは、背の高い好青年風のオランダ人の男性と、その横には少し小柄なオランダ人の女性がいた。2人とも笑顔を浮かべていて、とても人が良さそうであった。私はすぐに挨拶の言葉を述べ、住民であるその若い男性と握手をした。自分は朝早く起きて仕事をする必要があるから音楽のボリュームを少し下げたいと述べると、彼はすぐに謝って、音楽のボリュームを下げてくれた。そこからしばらく3人で自己紹介を含めて、色々話をしていた。

彼はフローニンゲン州の隣にあるフリースランド州からやってきたようだった。名前は発音がとても難しかったのだが、イエルマーといい、最後によりやく正しい発音できた時には、2人もとても嬉しそうにしていた。彼らにとっても私の名前は少し発音しづらいようだったので、彼のニックネームは「イエル」だということを教えてくれたので、私も自分の名前を短縮して“Yo”と呼んでくれと伝えた。

何やら彼は、もう少しで大学を卒業するらしく、フローニンゲンのある会社でマーケティング関係のインターンの仕事を始めるようだった。そのインターンが無事に終われば、そこに就職するとのことだった。オランダ人はやはり教育がしっかりしているためか、彼の

---

風貌や話し方などは大学生のそれではなく、立派な成人のそれのように思えた。そこからいろいろと話をし、最後にお互い何かあったときのために、携帯の番号を交換した。

この1件を通じて、オランダでは兎にも角にも対話を通じて相手を理解しようとする文化が強く存在することを改めて感じた。イエルの部屋のドアをノックし、彼に事を伝えた時に、「直接言いに来てくれてありがとう」という言葉を彼はまず最初に私に述べた。もちろん私も言い方には気をつけていたが、仮にどんなに相手に嫌な思いをさせない形で伝えたとしても、音楽の音を下げてください（もっと静かにしてください）ということを経験した人から「それを直接伝えに来てくれてありがとう」という言葉は決してもらえないだろう。しかもイエルはそれを純粋な笑みを浮かべて述べていたことがとても印象的だ。

イエルの部屋を後にし、自室に戻った後に、早速音楽の音を下げたお礼をテキストメッセージで送った。するとイエルは、私が早寝早起きをして仕事に従事していることを考慮して、10時以降は極力静かにするようにしてくれるとのことだった。

今回の小さな1件を通じて、改めてコミュニケーションの大切さを教えられた。イエルと話さなければ、お互いにどのような人間であるかがわからないままこれから暮らすことになっていただろう。そうした状態と、上下階に住む住人同士が知り合いであるという状態では、お互いの日々の生活の心理面で大きな違いが生まれてくるに違いない。イエルのインターンの成功を祈りつつ、そこからはすぐに安眠ができた。フローニンゲン：2020/8/7

(金) 06:51

---

## 6087. 身近にある豊かな自然：フリースランド訪問への思い

時刻は午前7時に近づいており、今は朝日が燦々と赤レンガの家々に降り注いでいる。この光景は毎日眺めていても飽きることはない。そこには、1日の始まりを祝す固有の美がある。

生命力に溢れた街路樹、赤レンガの家々、雲1つない早朝の青空、そして燦々と輝く朝日。それが織りなす調和的な美はとても美しい。こうした景観について思いを巡らせていると、上の階に住むイェルの出身地であるフリースランドのことを思い出した。ここはフローニンゲンのお隣の地域であり、この地域はいろいろな意味でユニークだ。

ちょうどアテネから帰ってきた時に経由したルーワーデンという街は、フリースランド州に属する。フリースランドでユニークなのは、他の11州と異なり、オランダ語の他にフリジア語も公用語としていることである。それによって、独自の文化がこの地域に形成されている。列車からルーワーデンの街並みを眺めていた時に、その街の落ち着きと美しさはとても魅力的に思えた。実は前々から1度ぜひ足を運んでみたいと思っていたので、今度本当に足を運んでみようと思う。

美術館もルーワーデンの街にあるようなので、そこを訪れたいが、ルーワーデンを含め、フリースランドで最も魅力的なのはその自然の豊かさだろう。調べてみると、フリースラ

---

ンドには、水路、湖、運河、古い小村、そして広大な牧草地など、豊かな自然が広がっているらしい。

フリースランドにあるワデン海は、ユネスコの世界遺産に登録されていて、ワデン海に浮かぶウエスト・フリース諸島には、開放的なビーチ、砂丘、灌木、牧草地、落葉樹林や針葉樹林もあるとのことだ。ワデン海という名前を初めて聞いたので、さらに調べてみると、この海は世界でも稀な砂州と干潟が繋がる場所とのことである。この海は生命の豊かさに満ち溢れているらしく、魚介類の他、ゼニガタアザラシやハイイロアザラシなどの哺乳類も生息し、渡り鳥にとっての大切な中継地点とのことだった。越冬の時期に、一千万羽以上の鳥たちが目的地へ飛び立つ姿は圧巻とのことである。

フリースランドにはその他にも、4つの国立公園があるとのことだった。そうしたことを考えてみると、自然を楽しむためにわざわざ北欧に行かなくても、そもそも北オランダも北欧のような場所であり、身近なところに豊かな自然は存在しているのだ。そうしたことを考えてみた時に、今年の年末年始はフリースランドの国立公園近くに宿泊してみるのもいいかもしれないと思った。当初の計画では、スペインのマヨルカ島で年末年始を過ごそうと考えていた。確かに、オランダの年越しは花火などで騒々しいのだが、国立公園付近であれば静かなのではないかと期待する。どうなるかはわからないが、今のところ今年の年末年始は、マヨルカ島で過ごすか、フリースランドの国立公園近辺で過ごそうと思う。フ  
ローニンゲン：2020/8/7（金）07:07

## 6088. 今朝方の夢

---

朝日の降り注ぐ外の景色を眺め、小鳥たちの鳴き声を聞きながら、引き続きゆったりとした気持ちで日記を綴っている。朝のこの時間帯にはいつも日記を綴り、日記を書くことから1日をゆつくり始める自分がある。そしてそこからは、絵を少々描き、作曲実践に入り、その後読書をするという流れがある。その後は、それらの実践を行き来する形で1日が過ぎていく。そうした形で流れる時間は至福の時であり、そうした幸福感に包まれた形で毎日を生きることができていることに感謝をしたい。

昨日はスペースシャトルのシンボルが現れる夢を見ていた。今朝方も記憶に残る夢を見ていた。夢の中で私は、日本の農園のような場所にいた。そこにある旅館に宿泊し、落ち着いた環境と自然を味わっていた。

朝、近くの畑にブロッコリーを取りに行った。その畑には様々な野菜や果物がなっていて、無料で何か好きな野菜か果物を毎日取っていいことになっていた。私はその日はブロッコリーをもらおうと思っていたのだが、そういえば先日もブロッコリーをもらったなと思ったので、カリフラワーが取れる場所に向かうことにした。

宿泊している旅館は農園の小高い山の上であり、そこから眼下の農園群を眺め、カリフラワーがありそうな場所を特定した。いざそこに向かって歩き始めると、ちょうど私の横に、大学時代の女性友達が現れた。彼女は長野出身であり、目の前の景色は長野の風景と似ているとのことだった。そこから私たちは話しながら目的の畑に向かった。途中で、立派な教会が併設された高校に遭遇した。私は思わず、「見事な教会だね」と呟いた。隣にいた彼女もうなづき、2、3何かそこで言葉を交わした。そこで夢の場面が変わった。

---

次の夢の場面は、舞台は全く同じ場所であった。ただし今度は旅館の中にいた。旅館の中には変わった空間があり、そこには連続する畳部屋があり、各部屋を仕切るものはふすまではなく、金属製の扉だった。私は1つの畳部屋にいて、そういえばこの辺りにはクマが出るらしいことを思い出した。すると、さらに3つ奥の畳部屋にクマが出たという知らせが入ってきた。私はすぐに金属製の扉を閉めて、こちらの部屋にクマが入ってこないようにした。

ところがクマが次にやってくる部屋には、1匹の猫と両親の実家にいる愛犬がいることに気づき、彼らを安全なこちらの部屋に移す必要があると思った。私はすぐに動き出し、クマをおびき寄せるために餌を遠くの方に投げて、そのすきに猫と愛犬をこちらの部屋に移動させた。その際に、愛犬が扉の前に置かれていたソファの上に飛び乗って、そのソファが滑る性質があったので、愛犬が足を取られて落ちそうになっていた。しかしなんとか踏ん張り、愛犬はソファを経由してこちらの部屋に無事にやってきた。私はそこでホッとした。

その後しばらくして、様子を見に、クマが出た部屋に行ってみた。すると、そこには想像していたのよりも小さなクマがいて、特に危害を加える様子はなかったが、突然その小熊がこちらに向かって突進してきたので、私は慌てて近くの竹の木の上に飛んだ。どうやら小熊は構ってほしかったようなのだが、その瞬間にはその意図がわからなかった。フローニンゲン：2020/8/7（金）07:27

### 6089. 夏らしい1日を振り返って

---

時刻は午後7時半を迎えた。つい今し方夕食を摂り終えた。断食を終えてからの回復食は美味であり、これまでサツマイモを食べていたところをニンジンに変えたところ、今の自分にはこちらの方が合っているようだ。腹6分ないしは7分ぐらいの形で夕食を摂り終えることができている、そのおかげで入眠がより速やかになっているような気がする。引き続きこの食事スタイルを採用していこう。

今日は天気予報を凌ぐほどに気温が上がった。結局、最高気温は33度に達した。それでもオランダの家庭には一般的にクーラーがなく、自分の家も例外ではない。だが、窓を開けてカーテンを閉めていれば、太陽の日差しによって部屋の温度が上がるのが防げ、クーラーがなくても凌げるほどの暑さだと実感した。これまでの経験上、おそらくこのぐらいの気温が例年に何度か達する最高気温であるため、今日を凌ぐことができたなら、これから仮に同じような暑さの日が出てきても大丈夫かと思う。今夜は寝室の窓も開けて寝よう。

本日はそのように暑い日だったので、夕方に買い物に出掛けた時には、運河に飛び込んで涼んでいる若者たちがいた。あまり綺麗とは言えない運河に楽しげに飛び込んでいく若者たち。そして、運河の上をボートで優雅に移動していく人たち。これがオランダ人の夏の過ごし方の一風景であり、それを眺めながら平穏な気持ちになった。

今日は雲ひとつない快晴であったことから、買い物に行く最中は暑さはあれどとても気持ちよかった。アテネと同様に、フローニンゲンも湿度が高くないためか、歩きながら汗をかくこともほとんどなかった。

---

今朝方、上の階に引っ越していた新しい住人のイエルについて言及していたように思う。気がつけば、今のアパートの区画に住む4世帯のうち、オランダ人でないのは私だけになった。しかも今は全員独身の男性が住んでいる。振り返ってみると、以前は2階にドイツ人の大学院生の若い夫婦が住んでいた。4年前から過去に上の階に住んでいた住人を順に振り返ってみると、サウジアラビア人の女学生、スウェーデン人の大学院生、そして日本人のピアニストの友人と続き、数日前にオランダ人のイエルが引っ越してきた。

この4年間唯一継続してこのアパートに住み続けているのは私だけになった。もうこのアパートの最古参である。今のところまだこのアパートから引っ越すつもりはない。それぐらいここが気に入っているし、フローニンゲンの街気に入っている。そして何より、オランダという国をとっても気に入っている自分がいる。

今日は、ようやくロイ・バスカーの“**Reflections on metareality: Transcendence, emancipation and everyday life**”を読み終えた。本書は大変素晴らしい書籍であり、いつもよりペースをゆっくりにして読み進めていた。人間の解放を希求した真の実践霊性学の参考文献として、この1冊は必ず挙げたいものであり、今後も何度も繰り返し読んでいこうと思う。バスカーの書籍を全て読んだ後、そこからフランクフルト学派の哲学者の書籍を順に読み進めていき、そこから美学書などを読むことを経て、また数ヶ月以内にバスカーの書籍を全て再読していこうと思う。明日からは、バスカーの“**Enlightened Common Sense: The Philosophy of Critical Realism**”を読み進める。早いもので明日はもう土曜日であり、この土

---

日は時間がたっぷりあるので、明日か明後日中に本書を読み終えることができるだろう。

フローニンゲン: 2020/8/7 (金) 19:27

### 6090. 昨日の考え事

時刻はゆっくりと午前7時半に向かいつつある。昨夜はベッドの上で少しばかり考え事をしていたためか、今朝の起床は6時半と非常にゆったりしたものだった。

土曜日の朝の穏やかな世界が今目の前に広がっている。青々とした街路樹たちが早朝の爽やかな空気を目一杯吸って呼吸をしている。すっかり朝日が姿を見せていて、地上に光を届けてくれている。どうやら今日も気温が上がるらしく、ここから来週の水曜日までは30度前後の日が続く。

すでに昨日33度を体験しており、特に問題なく過ごすことができたので、今日から水曜日までも何も問題なく過ごすことができるだろう。むしろこの夏らしい雰囲気を楽しめるに違いない。来週の木曜日と金曜日に小雨が降るようであり、その雨を境として気温が下がっていくという予報が出ている。それは秋の知らせのようだ。そこからは再び20度前後の日が続く。

昨日、無事に銀行のデビットカードをアクティベーションし、ハーグに住む友人に借りていたお金を返すことができた。それに加えて、前回の四半期の税金の計算に関して、お世話になっている会計士にサービス料の支払いなどを行った。

---

先月に家賃を自動で引き落とししてもらったところ、早くも今月の頭に来月分の家賃が支払われていた。いつもは月の終わり頃に翌月の家賃をオンラインバンキングサービスを通じて支払っていた習慣があるので、今月はそれをしないように注意しよう。でなければ、二重に支払いをしてしまうことになる。

昨日も雑多なことを考えていた。1つとして、成人が一生涯をかけて学習と発達を実現していくには、学校教育で受けた負の影響や学習に関して形成されたシャドーを解放していく必要があるのではないかというものだ。それほどまでに、学校という場は多くの人にとって、本来生涯に渡って継続されるべき学習や発達を阻害する要因に満ち溢れた場になってしまっているように思える。学校で得られたものをアンラーニングしなければならないということ、そして学校で刻み込まれたシャドーに対してシャドーワークをしなければならないというのは、なんという皮肉なのだろうか。

そのようなことを考えながら、教育哲学者のザカリー・スタインが述べていた「ラーニングとスクーリングは違う」ということについても考えていた。私たちはどこか特定の学校に通うことが目的になってしまっている傾向はないだろうか？ また、学校での諸々の活動だけが学習だと錯覚していないだろうか？ むしろ真の学習とは、何も学校に通うことによってしか得られないものではなく、学校に通ってなくても得られるものだと思う。自分自身の体験から言えば、むしろ自己を深める真の学習は、往々にして学校の外での体験や自らの自学自習によるものの方が大きいように思えてくる。その点に、ラーニングとスクーリングの大きな違いを見る。

---

仮に両者が混同されたまま、学校に通うことが最大の目的になってしまい、そして学校に通った挙句、学ぶことを愛する気持ちを喪失してしまったり、慣習的な価値観や知識が埋め込まれ、諸々のシャドーを形成してしまうというのはとても皮肉な現象のように思えてくる。そのようなことを昨日考えていた。

もう1つとして、人間の姿をした神を信じるのは人間中心的な発想の現れのように思われ、一方で、人智を超えた神的存在を否定するのもまた人間中心的な発想の現れなのではないか、ということについても考えていた。私たちは、つくづくこうした人間中心的な発想に絡めとられてしまう。人間を中心にして考えを進めていきたいというのは自我の防衛反応の一種なのだろうか。またそれは、社会の集合的なシャドーとも結びついているのだろうか。フローニンゲン：2020/8/8（土）07:36

#### 6091. マルクスの重要な指摘とマインドを養生してくれる読書

時刻は午前7時半を迎えた。外気はまだそれほど高くないはずなのだが、室内の温度が上がっているように感じる。今日は風がほとんどないためか、書斎と寝室の窓を開けていても風が吹き抜けていく感じがしない。

先ほどの日記に引き続き、昨日考え事をしていたことの続きを書き留めておきたい。昨日ロイ・バスカーの書籍を読む中で、マルクスが重要な指摘を行っていたことに気づいた。それは、1人1人の自由は、全ての人にとっての自由をもたらす必須の条件であるというものだ。この指摘は、発達理論を社会変革に適用する上で非常に重要なのではないかと思う。

---

というのも、往々にして発達理論は、優生学的な、さらにはエリート主義的な形で社会変革に適用される傾向が強いからである。ここで述べている「社会変革」というのは大きなものだが、もちろんそこには組織変革なども含まれる。発達理論を活用してそうした変革を行う際に、ある特定の人々の自由をより拡大させ、その一方で不自由や不公平を感じる人が拡大してしまうという現象をよく目にする。そこには上述のマルクスの発想が欠けているのだ。仮に1人でもある側面において不自由さや不公平さが拡大されてしまうのであれば、その社会変革はどこかおかしいのだ。そのようなことを考えていた。

今日もまたバスカーの書籍を読んでいく。今日からは、“**Enlightened Common Sense: The Philosophy of Critical Realism**”を読み進めていく。本書の文字は小さいが、その分、分量も200ページほどとさほど多くはないので、今日中か、少なくとも明日には初読が終わるだろう。

昨日もバスカーの書籍を読みながら、つくづくバスカーの提唱したメタ理論としての批判的实在論は、ケン・ウィルバーが提唱したメタ理論としてのインテグラル理論と補完関係にあることを感じていた。どちらも共に個人と社会の変容に言及したメタ理論ではあるが、あえて分類するならば、ウィルバーのインテグラル理論は個人の変容に対してより強みがあり、バスカーの批判的实在論は社会の変容に対してより強みがあると言えるだろう。著者の最大の関心事項に注意を払い。一連の著作を読んでいけば、著者が最も強調している領域というのが自ずから見えてくる。

---

バスカーの書籍は、自分のマインドを養生してくれているということを改めて思った。そもそも、読書とは本来そうあるべきものだ。マインドを養生してくれる読書というのは文字通り、マインドを養い、生かしてくれるものだ。バスカーの書籍で未読なものは、本日読むものを合わせると、残り3冊となった。このペースで読み進めていけば、来週中には全ての書籍に目を通し終えることができるだろう。そこからまた何度も読み返していくことによって、バスカーの思想体系を体現し、自らそれを実践で活用することを通じて、自分の思想体系の構築につなげていこうと思う。フローニンゲン：2020/8/8（土）07:54

### 6092. 創作活動と「不在の不在化」そして「共存在感」：今朝方の夢

今、小鳥たちの澄み渡る鳴き声が聞こえてきた。土曜日のこの穏やかな朝に、彼らはとても心地良さそうな鳴き声を上げている。街路樹の方を眺めると、枝に止まって戯れあっている小鳥たちの姿を見る。

今日もまた創作活動と読書に打ち込んでいこう。創作活動は、不在な存在が宿る基底に触れる営みであり、不在の不在化（**absenting absence**）を実現させる営みである。言い換えれば、創作活動とは、非二元の世界に触れ、そこに存在している多様な存在者を形にする営みなのである。そうした考えと共に、バスカーが提唱した「共存在感（**co-presence**）」ということについて考えが巡る。他者との対話の瞬間において、その人は私の中において、私はその人の中にいるという共存在感。これを感じられることもまた、存在の基底に触れる際に起こる現象ではないかと思う。そうした共存在感は、創作物との間にも生じる。そしてそうした感覚の中に、自己と創作物の双方が生きた形で立ち現れる。

---

再び書斎の窓を通じて見える青空を眺めた。青空の青空さに気づけば気づくほど、青の青さに気づくほど、自己はそれらに溶け込んでいき、それらと一体化する。非二元の意識体験とはこうした些細な形でも十分にもたらされるのだ。というよりも、それは本来いかなる瞬間においても顕現している世界なのだから、ふと私たちが手を止めて、その瞬間の景色や行為なりに没入すればその世界に触れることができるのだ。バスカーも一連の書籍の中で同様の導きをしている。

空を通じて非二元の感覚を少しばかり味わったところで、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、小中高時代の親友（SI）とグラウンドの上で話をしていて。彼は、プロサッカーチームのユースチームからプロの2軍に昇格したとのことだった。彼はそれを少し自慢しているようであったが、彼の實力からすると、それは偶然のように思えた。そうしたこともあり、あまり奢らないようにと彼に忠告をしておいた。

するとそこで夢の場面が変わり、次の夢の場面もまた同じグラウンドの上に私は立っていた。今度は、そこで友人たちとサッカーをしていた。それは何か学校同士の試合ではなく、またクラブチーム同士の試合でもなかった。雰囲気として、高校の体育の授業で行われているゲームのように思えた。そのゲームの中で、私は自分の役割はとにかく点を取ることだと自覚していた。そうした自覚はあったのだが、ついつい点を取ること以外にも手を出してしまい、コートの中を幅広く動いていた。

すると、ゴール前のチャンスの場面に自分がいなかったり、ゴール前でボールを受けた時には少しばかり疲弊している自分がいて、なかなか点を取ることが難しかった。それを反

---

省して、私は下手に下がってボールを受けることをせず、前線で張っておくことにした。すると、それが功を制し、相手のゴール前でポストプレーのようにボールを受けて、そこから反転してシュートを打つと、ようやく1点決めることができた。そこからは引き続き同様のプレーをしていこうと思ったところで夢から覚めた。フローニンゲン：2020/8/8（土）

08:09

### 6093. 夢を書き留め、夢と共に生きた明恵上人

時刻は午後7時半を迎えた。穏やかな土曜日がゆっくりと終わりに近づいている。今日も気温が高く、晴れた1日であったが、今は少し雲が出てきており、むしろそれが気温を下げてくれているように思う。明日からも晴れとのことだが、雲1つない晴天というわけではないようであり、部分的な雲が涼しさを与えてくれるだろう。

今日は夕方に、自分が自分自身の深い部分でつながる内側のつながり（**intra-connection**）と他者を含めた社会との相互的なつながり（**inter-connection**）について考えていた。そのどちらか片方ではなく、その双方の深度を深めていくこと。それがますます重要な社会状況になってきているように思う。

自己は自己と分断されてはならず、自己と他者及び社会は分断されてはならないのだが、今の社会の状況はそうした分断を強める方向に向かっているように感じる。内側のつながりと外側との相互的なつながりを回復させ、それらをより深いものにしていく試みに従事して行く。

---

午前中に、日本にいる知人の日記を読んでいると、大変興味深い人物について知った。その人物の名前は、明恵上人（みょうえしょうにん）という。明恵は、鎌倉時代前期に活躍した華嚴宗の高僧である。明恵の何に関心を示したかと言うと、彼は自分の見た夢を40年に渡って書き続けていたことである。実際に彼は、夢の日記として『夢記（ゆめのき）』という書物を残している。

明恵が夢を書き留めていたことだけに関心を持ったのではなく、明恵自身が書き留めた夢から示唆を得て、まるで夢とシンクロしながら現実世界を生きていたことに興味を持ったのである。端的には、夢と現実の二元論的区分を超えたりアリティの世界で彼は生きており、その事実に関心を持ったのだ。彼の生き方はまさに、私自身が日々夢日記を書いて、夢と絶えずシンクロしながら生きていることとつながっており、大きな共感の念が湧いてきた。

明恵が書き残した夢はまるで生き物のような命を持っていて、絶えず彼に生き方の示唆を与え、彼の信仰心を深めて行った。夢と日常の生活が不思議なシンクロをして進んでいく現象を私も日々体験している。

明恵について調べていると、彼は京都の高山寺で長き渡って生活をしていたようだ。今年は石川県と福井県に足を運ぶ予定だが、来年の秋は京都に行ってみようかと思う。その際には、高山寺に訪れ、それと臼井霊気の始祖である臼井甕男が自身の霊力を開眼させた鞍馬山にも足を運んでみようかと思う。

---

今夜はどのような夢を見るだろうか。啓示的な贈り物としての夢を私は時に見る。それは「偉大な夢」と形容してもいいほどに示唆に富んでおり、自分に導きをもたらす。夢を絶えず書き留め、絶えず夢と共に生きた明恵上人。明恵上人は自分にとってどこか他人ではないような感覚をもたらす。フローニンゲン：2020/8/8（土）19:47

#### 6094. メタクライシスの時代に：「献身」について

時刻は午前6時を迎えた。今朝は午前5時半頃に起床し、起床した瞬間にはまだ辺りは薄暗かった。そして何より、今朝は空に雲が覆われていたので、朝焼けを見ることができなかった。朝焼けを見ることができなかったのは残念であるが、ここ数日間雲がほとんどない快晴の日が続き、気温もかなり上がっていたので、中休みにちょうど良いように思った。実際に今日は、部分的に雲がかかっているような天気のようにあり、気温の上昇は29度で止まるとのことだ。30度に満たなければ、寝室と書斎の窓を開けていれば涼しさを感じられるだろう。

新たな週を迎える明日から来週の木曜日までは再び30度を越す日が続く、木曜日に雨が降ることをきっかけにして、再び25度前後の日が続くようだ。おそらくそれを持って秋の始まりだとみなしてもいいかもしれない。今年は冷夏であり、同時に秋の到来が例年以上に早い印象だ。

昨日、現代社会が直面するメタクライシスについて考えていた。現代は、教育の危機、経済・金融の危機、生態系（エコロジー）の危機、政治の危機、実存的危機、倫理・道徳的危機、といった諸々の危機が複合的に同時に押し寄せている時代である。私たちはそうした

---

時代の中に生きながらにして、こうした複数かつ1つのメタクライシスと向き合うことを余儀なくされている。その課題の難易度は極度に高いのだが、それと真摯に向き合っていかなければ、人類は危機に瀕してしまうのではないかと思う。イギリスの哲学者のロイ・バスカーが提唱した批判的实在論や、アメリカの思想家ケン・ウィルバーが提唱したインテグラル理論は、そうしたメタクライシスを乗り越えて行く上で不可欠なメタ理論になるだろう。とりわけバスカーの批判的实在論は、社会変革を強く志向するメタ理論であるがゆえに、私としては、この理論を中核に据えて自分にできる実践を日々行っていく。

昨日はその他にも、「献身」という言葉について考えていた。身を献上し、身を捧げながらにして取り組みに従事していくこと。その姿勢はとても大切なものかと思う。そしてこの時に、捧げるにふさわしい身があるのかどうかも大切になる。つまり、実践を行う者の身体の状態がいかほどかということである。

学習や実践の出発点かつ、それらを推進していくのは身体であり、身体意識である。それらが良好・良質のものであるかどうか、それについては絶えず意識を向けていき、それらの状態を整え、より健全なものにしていく。自らの潜在能力というのは身体を通じて花開き、身体を通じて発揮される。そのようなことを考えていた。フローニンゲン：2020/8/9

(日) 06:27

## 6095. 今朝方の夢

---

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今、空には雲がかかっている、今朝は朝日を拝むことができない。朝日が地上に降り注いでこない分、外には幾分涼しさがある。それに加え、今朝はそよ風が吹いている。ここ数日は暑い日が続いていたので、ここで一度涼しい日が間に挟まれるのは嬉しいことである。

アテネで紛失したクレジットカードについて、早速新しいカードを日本で発行してもらい、それらは来週の初旬頃に届くそうだ。今は財布がなく、不便であるので、クレジットカードが届き次第、新しい財布を求めたい。今のところ、街の中心部にある**Talens Lederwaren**という革製品専門店で購入しようと考えている。この店のウェブサイトを確認すると、気品があって自分の美的感覚に合致しそうな財布が販売されていそうだ。今度はズボンのポケットにスツと入るようなコンパクトな財布を購入しようかと思う。

昨日、40年間にも渡って自身の夢について書き留めていた鎌倉時代の高僧明恵上人について書き留めていたように思う。彼がどのように、どのような角度から夢を書き留めていたのかは非常に気になる点なので、この秋に一時帰国した際には、明恵上人に関する書籍を購入しようかと思っている。

それでは今朝方の夢について振り返り、その後、創作活動と読書に励んでいきたい。夢の中で私は、高校時代に過ごしていた社宅にいた。どうやら私は受験を控えているようであり、季節は夏のような感じだった。ちょうど今、夏休みに入っていて、勉強をする時間がたくさんあり、私の気分は高揚していた。朝起きてリビングの方に向かうと、母方の祖母が掃除をしていた。何か手伝うことはないかと祖母に尋ねたところ、リビングのカーペットを少

---

し持ち上げて欲しいとのことだったので、私はそれを行い、私が持ち上げている間に祖母はカーペットの下に掃除機をかけた。

程なくして掃除は終わり、朝食の時間になった。しかし私は、朝食を摂ることによって時間が無駄になり、さらには飯を食べることで消化にエネルギーが削がれてしまうと思ったので、これからは朝食を食べない形で勉強することにした。また昼に関しても、食べたとしても非常に軽いものにしようと思った。時間が掛からず、そして消化に良いものを食べようと思ったのである。

いざ自室で勉強に取り掛かろうとすると、どういうわけかもう午前10時半になっていて、起床からずいぶん経っていたことに気づいた。部屋の掃除があつたり、その他にも祖母や母と話をしていたことから、そのような時間になってしまっていた。私は少し焦った気持ちになったが、そうした気持ちで勉強しても身にならないだろうと思ったので、一度呼吸を整え、ゆったりとした気持ちで勉強に取り掛かることにした。いざ勉強を始めてみると、数学の勉強をする必要があつたが、他の科目にどうしても時間を割いてしまう自分がいた。

私が志望している大学は、とにかく数学が難しく、数学が鍵を握る。それにもかかわらず、随分と数学から離れていたことに気づき、そうであれば、そもそも日本の大学に行く必要などないのではと思い始めた。そこから私は、アメリカのアイビーリーグカリベラルアーツカレッジに行こうかと考え始めた。そこで夢の場面が変わった。その他に覚えている夢としては、少し前に知り合った知人が公園のような場所において、そのベンチ付近で

---

作家の三島由紀夫と肩がぶつかり、彼女の眼が飛び出すかのように大きく見開いたのを覚えてる。

ちょうど昨日、ユングがかつて、「眼は母の子宮であり、瞳孔はその中から生まれる子供である」と述べていたことを知ったので、夢の中の彼女の眼が飛び出すかのように大きく見開いたのは、何か示唆深いものがある。フローニンゲン：2020/8/9（日）06:42

### 6096. 大いなる導きに感謝して

時刻は午後7時半を迎えた。今日の朝方は、空が雲に覆われていたが、午後からはすっかり晴れ間が広がった。今この時間帯も空は晴れ渡っていて、夕日が燦々と輝いている。

日曜日がゆっくりと終わりに近づいていき、明日からはまた新たな週を迎える。今週も非常に充実しており、明日からの新たな週の充実に期待が持てる。日々、少しずつ深まっていく充実感。それと足並みを合わせる形で、自己が深まり、人生が深まっていく。季節の進行のようにそこにはサイクルがあるが、そこには単純な状態変化ではなく、質的な深まりがある。それが人生における季節の進行の特性である。

今日の午後に近所のスーパーに買い物に出かけた時、大きな発見をした。ここ最近始めた視力回復トレーニングの一環として、眼鏡をかけずに買い物に行き、遠くを見るようにしていた。ちょうどスーパーの帰りに通る住宅街でも同じことをしていた時に、遠くに見えた標識に視点を合わせようとした。すると、その標識に、左がモンドリアン通り、右がルーベンス通りと書かれていることに気づいた。私はそれを見て心底驚いた。というの

---

も、その道は過去4年間の間、近所のスーパーに行く時にはいつも通っていて、もう合計数百回以上通ったことがあったのにそれに初めて気づいたからである。しかもその標識は目立つところに掲げられているにもかかわらず、私はその標識をこれまで認識することがなかったことにも驚かされた。標識があることは視界の盲点に映っていたのかもしれないが、そこに記載されている通りの名前が、まさかオランダを代表する2人の偉大な画家だったとは、今日のその瞬間まで全く知らなかったのだ。

今私が住んでいるアパートの通りはブライトナーという画家の名前が付されていて、隣の通りはヴァン・ゴッホの名前が付されている。自分がこの4年間、芸術家の名前に彩られた場所で生活をしてきたことを改めて知る。「モンドリアン通り」という記載を見た時、ちょうど数日前に、モンドリアン美術館に9月にでも足を運ぶつもりであるということを目撃して書き留めていたところだった。その偶然にも驚かすにはられない。

今、不思議な運命の導きが私を取り巻いている。それがいつも私の向かう方向を指し示してくれている。私にできることは、その導きに気づき、感謝の念を持ってその導きに従うことだけである。その他には何もいらない。作為なく、大いなる存在からの導きに従っていけばいいのである。

モンドリアン通りという名前を見て、9月にはなんとしても時間を作ってモンドリアン美術館に行こう。それは良い日帰り旅行になるだろう。ひょっとしたらルーベンスの美術館もどこかにあるかもしれない。早速調べてみたところ、今は改修中だが、ベルギーのアントワープにあるアントワープ王立美術館にルーベンスのコレクションが充実しているらし

---

い。ちょうどベルギーのアントワープも今後の旅行計画の候補地に入ってるので、当地を訪れた際にはぜひアントワープ王立美術館に足を運ぼう。

フローニンゲンでの生活はちょうど今月で5年目を迎えた。ひよんなことから認識上不在だったものが不在化され、モンドリアン通りに気づくことができたことは、きっと何かの導きであり、その導きの先にまた新たな導きがあるだろう。導きそのものと導きと導きの間にあるもの。それが自分の人生を絶えず豊かなものにしてくれている。そのことへ大きな感謝の念を捧げたい。フローニンゲン：2020/8/9（日）19:44

### 6097. 本日の計画

時刻は午前7時を迎えようとしている。この時間帯はもうすっかり明るくなっており、朝日が赤レンガの家々を照らし始めている。

今朝の起床はゆっくりと午前6時過ぎだった。目覚めた時に、寝室から薄赤い朝焼けを拝むことができた。今日からは新たな週となる。今日の計画としては、昨日、ある原稿の執筆依頼を受けたので、その原稿を書き上げようと思う。そうしたこともあり、今日は読書の代わりに、原稿執筆に時間を割きたい。その原稿は、先日知り合った画家の知人の方に関する内容であり、私の担当は、インテグラル理論と成人発達理論を含めた自分の専門性の観点からその方の作品世界と作品の魅力について紹介することである。原稿の文字制限がタイトなので、どのような論点を盛り込むのかを事前に考えておき、いずれも簡潔な文章で執筆を進めていきたいと思う。

---

昨夜の就寝前にはすでにアイデアがいくつも浮かんでおり、それらを書斎の机に置かれた裏紙のメモ用紙に書き留めておいた。それらのメモをもとにして文章を書けば、おそらく今日中に初稿を書き終えることができるだろう。今回は文章執筆の依頼から締め切りまでそれほど時間がないが、今日中に速やかに初稿を書き上げ、少しばかり文章を寝かせ、明後日に再度文章を眺めてみる。そこで追加修正があればそれを施して、先方に提出しようと思う。

今日はその他にももう1つやることがある。先日のアテネ旅行で財布を盗まれた時に、オランダの居住許可証も盗まれてしまっていたため、新しい許可証を発行してもらう必要がある。その手続きはオンライン上からもできるのだが、オンラインで必要事項を全て記入し終えた後に、オンラインで申請費用を支払うことがどうやってもできなかった。

オランダの銀行カードを用いてオンライン上で支払いを行う際に、カード読み取り用の機器をパソコンに接続して支払いをしようと思って何度試しても、うまくカードが読み取られないのである。数年前にもこのような問題があったように思う。その際も結局オンライン上での支払いに関する問題は解決されず、リアルな場での支払いをしたように記憶している。

オンラインを通じて許可証の再申請ができれば楽だったのだが、それができそうにないので、起業家ビザを申請したのと同じように、申請書をプリントアウトし、それに記入する形で移民局に送ることにした。今日の午後に1件ほどオンラインミーティングがあり、それを終わったら、申請書とアテネの警察署に発行してもらった紛失盗難届出書をプリントアウト

---

トしに、ノーダープラントソン公園近くのコピー屋に散歩がてら立ち寄る。そこでついでに、フローニンゲン大学が発行しているPDF1枚の今年1年間のカレンダーもプリントアウトしてもらおう。

申請書の項目についてはもうオンライン上で記入していたこともあり、申請書の項目を速やかに埋めていくことができるだろう。秋の一時帰国までにあと2ヶ月ほどあるので時間的にゆとりはあるが、できるだけ早く新しい居住許可証を得ておきたいと思うので、コピー屋から帰ってきたら、すぐに申請書に記入をし、夕方に近くの郵便局に行ってそれを郵送する。

今後オンライン上で支払いができないと不便なので、この問題に関しては明日街の中心部に行く予定があるので、銀行に立ち寄ろうと思う。モバイルアプリの登録をする際にも、最初にカード読み取りの機器を端末に接続する必要があるのだが、その認識がうまくいかないのだ。この問題を明日解決することができればと思う。フローニンゲン: 2020/8/10

(月) 07:12

### 6098. 今朝方の夢

時刻は午前7時半に近づこうとしている。今、朝日がますますその光を増し、地上が輝きに満ち溢れている。近くの街路樹では小鳥たちが朝の合唱を奏でている。どうやら今日も気温が30度を越し、32度ほどに到達するようだ。すでに数日前に33度を経験し、その日も特に問題なく過ごすことができたので、今日の暑さも身構える必要はないだろう。

---

天気予報を見ると、結局今週の金曜日からはもう秋に向かってどんどん気温が下がっていくようなので、30度を越す夏らしい日々をあともう少しだけ味わいたいと思う。夏を自分の身体を通じてじっくり味わうことにより、夏のエネルギーが体内に取り込まれ、それが秋や冬の活動に向けた肥やしになるだろう。

それでは今朝方の夢について振り返り、その後創作活動をして、そこからは依頼を受けた原稿の執筆に取り掛かりたい。夢の中で私は、ちょうど昨晚原稿の依頼を受けた知人と話をしていて。場所は日本のどこかであり、それほどゴミゴミした場所ではなかったが、比較的大きな街だったことは確かだ。ひょっとしたら、東京のどこかの街かもしれない。

道端で私たちはいろいろな話をしていて、ちょうどその時には一緒に行っていたイベントか何かの最中であり、私やその知人に話しかけてくる参加者がたくさんいた。そうしたこともあり、その知人の方とは後でまたゆっくりと話をすることを約束した。その後、その知人の妹さんと一緒にその街のマラソン大会に出場することになった。もう実際に走り始めていたのだが、私は参加者の中で置いてけぼりになっている人がいないかどうかを確認するために、最後尾で全ての参加者を見守りながら走ることにした。私の横には知人の妹さんがいて、歩く速度ぐらいのゆったりとした形で走りながら、会話をしていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は日本の旅館の一室にいた。そこは畳部屋であり、落ち着きがあった。畳部屋にはすでに人がいて、見知らぬ日本人の中年男性が1人、そしてオランダ人の若

---

い男性が1人いた。私は2人に話しかけた。すると、日本人の中年男性が私たちに面白いものを見せてくれるという。

その男性が部屋の隅っこに行き、床に置かれていた布を持ち上げると、そこに1匹の大きなメスのてんとう虫がいた。それは私にとってはとても可愛らしく思え、その気持ちが伝わったのか、そのてんとう虫は私に懐いてきた。私が床に仰向けになると、そのてんとう虫は私の顔に止まって戯れてきた。すると、そのてんとう虫は体から白いまゆのような膜を出し始め、私の顔はそれで覆われた。特に不快感はなかったのだが、それが口に入りそうになったので、私は口を閉じ、しばらく黙ったまま、てんとう虫がなすままに身を任せていた。

その後、中年男性がまゆをすくい上げてくれ、私はそれを記念にもらった。そこでその中年男性は、オランダ人の若い男性にも床に横になるようにと述べたのだが、オランダ人のその男性はてんとう虫が嫌いのように、何よりも顔にまゆを張られることを気持ち悪がっているようだった。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私は実際に通っていた中学校の職員室前の玄関にいた。見ると、そこに野球部の友人（RS）を含め、何人かの同じ学年の生徒と、後輩たちがいた。すでに彼らは学校を卒業していて、何かの記念撮影をしているようだった。写真を撮影するだけでなく、後輩に向けたビデオメッセージの撮影もそこで行われていた。そのメッセージの中で、野球部の友人が、「うちの学校は、勉学に関してはとても軽い学校です」と述べて

---

おり、私は笑いながら確かにそうだと思った。彼らの撮影風景を眺めていると、職員室の玄関の壁にいくつかの絵画が飾られていることに気づいた。

よくよく見てみると、そこには歴史学者の上原専禄先生の自画像が飾ってあって驚いた。その自画像の背景には見事な風景が描かれていて、それは自画像かつ風景画でもあった。その他の絵もゆっくりと眺めようと思ったところで、お世話になっていた社会科の女性の先生の声が聞こえてきた。そこで夢から覚めた。

夢を書き留めた後に再度夢のシンボルについて振り返ってみた。最初の夢の中で印象的なのは、もちろん昨晚原稿執筆の依頼を受けた知人の方が早速夢の中に出てきたことではあるが、それよりも印象的なのは、最後にマラソンをしているときの自分の行動である。

私は自分のタイムを出すためではなく、参加者の最後尾について、誰1人として脱落する者が出ないようにゆっくり走りながら見守っていた。それはどこか、ロイ・バスカーの一連の書籍を読む中で、たびたび出くわしたマルクスの社会変革の発想の現れではないかと思ったのだ。端的には、誰か1人でも不公平さや不自由さを感じている限りにおいて、それは真の社会変革ではなく、誰1人としてこの社会から脱落させてはならないという発想である。私はその発想を体現させる形でマラソンを走っていたように思う。

現実世界におけるここからの取り組みは、まさにゴールの見えないマラソンを走るようなものであり——実際に、夢の中のマラソン大会のゴールは未設定であり、未知であった

---

——、決して焦ることなく、それでいて自分にできる限りのことをしていこうと改めて思った。

そして、その次の夢に現れたてんとう虫について、早速ドリームダイクショナリーで調べてみた。すると、夢の中でてんとう虫を見ることは、美と幸運を象徴しているとのことだった。美への関心の高まりと、日々幸運な出来事——アテネでの財布の盗難もまた見方を変えれば色々と幸運な出来事だった——に遭遇する頻度が高まっている実感があるため、それもとてもうなづけるシンボルだった。ここから自分の内側の美的感覚がさらに育まれ、より多くの幸運が訪れることを願っている。フローニンゲン：2020/8/10（月）07:53

#### 6099. 滞在許可証の再申請を終えて：夕方の嬉しい訪問者

時刻は午後7時を迎えた。今、穏やかな夕日が夕方のフローニンゲンの空に浮かんでいる。今日もまた1日を通して素晴らしい天気だった。午後にオンラインミーティングを終えた後に、ノーダープラントソン公園近くのコピー屋に足を運び、依頼をしていた書類のコピーを受け取った。それは、紛失した居住許可書の申請書類である。コピー屋と自宅の往復の間の40分間はとても良い散歩の時間となり、オンラインミーティング後の自分の頭を落ち着かせてくれた。思考を用いる活動と身体を用いる活動が最近は自然とバランス良く行われており、コピー屋への散歩もまたひよんなことからやってきた良い運動になった。自宅に戻ってきてからすぐに申請書の記入を始め、幸いにも記入する項目は多くなく、すぐに全ての記入を終えた。

---

記入の途中で、パスポートのコピーも必要であることがわかり、それについてはコピーをしていなかったなので、すぐさま再度コピー屋にデータを送り、再びコピー屋に向かった。往復40分程度の散歩だったので、それほど面倒だとは思わず、むしろ2往復の合計で1時間半ほどの散歩を楽しめたことを喜んだ。

無事にパスポートのコピーを受け取り、ちょうどそのコピー屋では切手も販売していたので、封筒を持って行って正解であった。実は帰りに郵便局の機能が備わった小さなスーパーに立ち寄ろうと思っていたので、その手間が省けた。コピー屋の店員の女性に切手をもらい、コピー屋の目の前のポストに封筒を投函した。いったんはこれにて落ち着である。後は移民局の手続きを待ち、申請の受理の連絡を葉書を通じて受け取ることが今後の流れになる。

おそらく実際の滞在許可証は、再びズヴォレの移民局にアポイントメントを取って、直接受け取る必要があるだろう。早ければ来月の初旬あたりに滞在許可証を受け取れるかもしれない。ズヴォレの街に行く機会はほとんどなく、これまでも移民局を訪れることを目的にしかこの街を訪れていない。ただし直近の2回においては、移民局に行った後に街の中心部の美術館に足を運ぶようにしている。今回もまたズヴォレの移民局に行く必要があったら、美術館に足を運びたいと思う。

たった今、水を取りに一度立ち上がり、書斎の机に戻ってくる前に窓辺に近づいてみたときに、嬉しい訪問者が部屋の内側の窓にいた。とても小さくてんとう虫だった。偶然にも、ちょうど今朝方てんとう虫が現れる夢を見ていて、その夢について朝方書き留めてい

---

た。夢と現実世界がシンクロするかのように生きていた明恵上人のように、まさか夢の中と同じく現実世界でもてんとう虫が現れるとは全く想像できなかつたことである。

私はしばらくてんとう虫を眺め、窓から外に逃してあげようとする、そのてんとう虫は外に行きたくなかつたのか、窓の上の方に走っていき、捕まえられないような隙間の中に隠れてしまった。それを見て、部屋にいただけいけばいいと私は思った。夢の中でてんとう虫を見ることは、美と幸運のシンボルなのだ。この現実世界もまた夢であるとみなせば、先ほど実際に目にしたてんとう虫は、この世界での美と幸運を象徴している。フローニンゲン：2020/8/10（月）19:21

#### 6100. あの頃の思い出：フローニンゲンの街の根底に流れる平穏さ

時刻は午前6時半を迎えた。今、朝日がゆっくりと昇り始めていて、赤レンガの家々の屋根に輝きが灯り始めた。今日はそよ風があり、この時間帯はとても涼しい。

ここ最近では連日30度を超えるような日々が続いていたが、それもどうやら今日と明日までのようだ。明後日からは天気が崩れ、連日雷が伴うような雨が降るとのことである。おそらくそれを持って夏が終わり、秋がやってくるのだろう。今年の夏は、夏らしさを感じられる期間がとても短かつた。しかしそれでもここ数日、夏の太陽の光を浴び、身体にエネルギーが随分と蓄えられたように思う。

昨夜、Spotify経由で懐かしい曲を聴いた。それは菅井えりさんの曲である。初めて菅井さんの曲に出会ったのは、スタニスラフ・グロフが考案したホロトロピック・ブレスワークの

---

ワークショップにパークレーで参加した時だ。ワークショップのBGMの1曲に菅井さんの曲が入っていて、ワークショップでの体験の深まりと相まって、その和的な曲を聴いた時、感極まってしまったことを覚えている。その時に流れていたのは「今昔物語」という曲だ。

あの時の私は、もう日本に戻ることはないと固く決めていたときであり、同時にジョン・エフ・ケネディ大学の卒業が決まっていながらも将来が完全に宙吊りになっているような状況であった。そのような状態でワークショップに参加し、そこでの体験がきっかけになってか、そこからすぐに人生の新たな扉が開いた。そのような思い出が蘇ってきた。音楽の持つ不思議な力を改めて実感した次第である。

昨日、近所のコピー屋に散歩がてら歩いて行った時に改めて思ったが、アテネの街と比べて、フローニンゲンの街に醸し出されている雰囲気随分と違うことに気づいた。もちろんどの街でも何が起るかわからない物騒な世の中だが、確かにこの街には心安らげる平穏な雰囲気が流れている。実際にこの街の人々の表情を見ていると、どこか根底でくつろいでいることが見て取れる。昨日も午後から思い思いに時間を過ごしている人たちの姿を多く見た。近所では、自宅の庭の木陰で読書をしている人たちの姿を随分と多く見た。近所の公園では、芝生にマットを敷いて日光浴をしている人も随分いた。公園の近くのカフェでは、ゆっくりと飲み物を飲みながらくつろいでいる人たちの姿を多数見た。彼らの生活のあり方を眺めていると、なお一層のこと、この街の根底に流れている平穏さを思っ

---

た。それに加えてゆったりとした時の流れがあることが、私がこの街に長くとどまっている大きな理由だろう。

昨日の午前中に、無事に依頼されていた原稿の執筆を終えた。正味1時間ほど集中して文章を執筆したところ、規定の文字数を少し超えるぐらいの文章となり、無事に初稿を書き上げた。先方からは少し字数をオーバーしても大丈夫とのことだったので、とりあえず速やかに原稿を書き上げることができてよかったと思う。今日は1日文章を寝かせ、明日に再度加筆修正を加えてから先方に提出しようと思う。フローニンゲン: 2020/8/11 (火) 06:52